

Ⅱ 発掘された中世城郭について

菊池眞太郎

1. はじめに

県内における中世城郭は、地誌、郡誌等の記載によりかなり以前からその存在を知られていたが、いづれも文献史的、探訪的内容であり、体系的な報告例ではなく、城郭に関する研究も戦前・戦後を通じて低調であった。

昭和40年代に入ると首都圏内に位置する為に、種々の開発事業が県下、特に下総台地一帯に及ぶに至り、幾つかの遺跡が開発と伴に消滅していった。このような状況下で、これら開発事業に対応し、遺跡の保護を計る為に、県教育委員会では昭和45・46年に顧問に国土館大学教授黒板昌夫氏、調査主任に松下邦夫氏という中・近世遺跡調査団が結成され、全県下の中近世遺跡の調査が実施された。調査は所在地、占地状態、形状、遺構、現在の利用状況等10項目にわたり確認が行なわれ、2年間で対象市町村83ヶ所という数に及び、城跡—283、館跡—56、砦跡—143、陣屋跡—62、牧—4、その他—38、合計586という数の遺跡の確認が行なわれた。これらの個々の遺跡に対して基本台帳が作成され、中・近世遺跡調査目録として刊行されたのである。これは城郭研究の基礎的資料を提供するとともに、これ以降の研究に対して重要な資料となっている。なお、前述した遺構の数は昭和52年に一部整理され、城跡—361、館跡—60、砦跡—132、陣屋跡—64、牧—19、その他—106、合計742と増加している。

これらの調査によって確認された遺跡の概要を簡単に述べてみると、千葉県其自然風土にあいまった築城が行なわれていることが伺い知れる。下総と上総の北部、いわゆる北総台地では、大小の河川、沼等により樹枝状に台地が開析を受け、半島状を呈する台地が多くみられる。その先端部に多くが立地され、いわゆる戦国丘陵（台地）城郭と呼ばれる占地形態の遺構が、その大多数を占めている。市原～成東を結ぶ線より南は、房総丘陵が南端の白浜まで続くことにより、占地形態も山城、あるいは平山城というような形態が多く、両者には自然地形の相違による、占地形態の相違点が見出されるのである。これらの城館跡では、大椎城、亥鼻城、成東城、真里谷城等の大規模な遺跡を除くと、比較的小規模な遺跡が多い。特に下総台地に数多くみられる丘陵城郭等では、自然地形を巧みに利用し構築するというような類例が多く、これらはあまり大規模とは言えない普請である。これらの遺跡が全国的レベルより見た場合、あまり大規模とはいえない点は、房総半島という地域性、強力な戦国大名が輩出しなかった点などが、一つの要因としてあげられる。また近世においては、江戸に近いということで小分割統治がなされ、他地域にみられるような豪壮な城郭建築が発達しえな

かったのである。

発掘調査は昭和37年に松戸市大谷口に所在する小金城に対して、考古学的方法による発掘調査が行なわれたのが最初で、昭和55年までに40数例の城、館、牧跡等の調査が行なわれている。

本章では小金城に始まって、代表的な調査例を取り上げ、占地形態、囲郭型式、調査の成果等より、若干の考察を述べてみる。

2. 発掘調査

小金城

松戸市大字大谷口に所在する。江戸川の低地を望む洪積台地上で下総台地の西端に位置する。城跡付近は台地が樹枝状に開析され、城の縄張りは巧みにそれらを利用して築かれている。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭型式は多郭雑形である。

築城の開始は享禄3年(1530)、完成したのが天文6年(1537)で、8年間を費やして築かれ、創築者は、千葉氏の老臣原氏の重臣であった高城氏で、その後天正19年(1591)に城を明け渡すまでの55年間がこの城が存続していた期間である。このように存続時期と創築者が判明している点が、県内においても数少ない遺跡として、また城郭史の中でも貴重な位置を占めている。

発掘調査は昭和37年に行なわれ、本城・中城・外番場・馬屋敷と呼ばれている郭に対して行なわれ、また各郭の内部遺構の他に、それらに属する空堀、土塁、櫓跡等の調査が行なわれた。本城では四棟の建物跡が確認され、中城では建物跡と思われる柱穴が多数検出されたが、個々の建物跡としてはとらえられなかった。外番場・馬屋敷とも建物跡の存在を示唆される柱穴が検出されている。また、郭内では6基の土壇、2基の地下式土倉が検出されている。空堀は深さ9～10mを測り、外番場東方では箱堀、本城北方では薬研堀を呈している。土橋、櫓台は、あらかじめ設計段階で計画的に掘らずに残されていたものである。

出土遺物は、その規模の割には多くはない。かわらけは五類型に分けられる。内耳土鍋、陶・磁器、鉄砲玉、石臼、古銭、金属器、とその種類は多い。これらの遺物はいわゆる中世の所産と考えられるべきのものであり、また、前述したように城の存続期間が明確であるがゆえに、比較の素材としても十分な価値を有し、これらの遺物と他の城郭より出土する遺物との比較研究が、今後の県内の城・館跡の調査でも重要となってくる。

成東城

山武郡成東町成東字城の内に所在する。海拔50m前後の独立丘陵上に位置し、周囲は約

2kmを測り、台地全域を利用するが、同時期にその全域を使用したか否可かは不明である。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭型式は築城年代により異なり、旧い方は単郭雑形（A）、新しい方は多郭雑形（B）である。

発掘調査は行なわず、昭和46年に表面の遺構を観察し、これを計測して図面の作成を行なった。

（A）の遺構としては、郭、空堀、土塁等が確認され、空堀には折邪があり、（A）の遺構の築城年代の根拠としてあげられ、16世紀初期と思われる。これに対して（B）の遺構としては、3つの郭、土塁、空堀等が確認され、縄張の複雑さ、強固な点から16世紀後半の戦乱の中で、（B）の構築の必要性が生じて来た所産であると、調査者は語っている。発掘調査を行なっておらず、また文献的にも築城年代等不明な点が多い中でも、成東城の時代的な位置づけは、やはり16世紀以降のものと考えるのが妥当であろうと考えられる。

津 辺 城

山武郡成東町津辺に所在する。半島状舌状台地の先端に位置する。

占地形態は丘陵城郭、囲郭型式は多郭雑形である。

成東城の調査と平行して表面遺構の観察が行なわれている。

遺構は3つの郭から成立しており、その中でも特に目立つものとしてはⅠ郭とⅡ郭と間にある空堀が、『L』字状の屈曲、あるいは櫛形、Ⅱ郭とⅢ郭の間では、やはり空堀が入口をはさみ『L』字状の屈曲をみせている。これらも折邪と同じような遺構としてとらえるならば、やはり、この津辺城の築城年代は、成東城の（B）と、ほとんど差のない時期、16世紀以降頃に築城されたものと考えられる。

松 子 城

香取郡大栄町字松子に所在する。大須賀川の本流及び支流により開析された半島状舌状台地の先端に位置する。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭型式は直線連郭である。

発掘調査は昭和45年に行なわれ、遺構としては、3つの郭、土塁、空堀、腰曲輪等が確認されている。郭の1つで後詰で呼ばれる地区では、建物跡の存在が示唆されるピット群が検出されたが、詳細は不明である。

出土遺物は少なく、かわらけ、陶器、古銭、刀子、鉄製品である。松子城の築城は遺構・遺物から検討しても戦国期の終りごろの所産と考えられるが、明確な時期については不明である。

中 峠 城

我孫子市中峠字亀田谷に所在する。北を古利根川に面する半島状台地の先端に位置する。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭型式は直線連郭である。

台地の先端より、それぞれが台地を分断するようにほぼ南北に3本の堀が掘られ、三つの郭を形成している。発掘調査はこのうちの東側の郭、および真中の郭の一部、それぞれの南半分に行なわれた。郭内部はその全域を調査するに至らなかったが、城跡に伴うと考えられる遺構は検出されなかった。空堀には10本のトレンチが設定され、そのいずれのトレンチにおいても薬研堀の形態をとることが判明した。

遺物は郭内部でかわらけ2点、中世陶器2片、空堀内よりかわらけ8点出土している。

中峠城は、その規模の割合には、比較的単純とも思える縄張であるが、北側は古利根川に面し急峻な崖を持ち、南側では緩い傾斜となる崖の部分には腰曲輪を配するなどして、それなりの防禦設備を備えているといえよう。築城年代は不明であるが、戦国期の下総の状況下で築かれた可能性が強く、16世紀も後半以降の築城と考えられる。

小林城

印旛郡印西町小林字城山に所在する。町の西側には手賀沼、東側には印旛沼の二つの沼に挟まれた中で、下総台地が開析され樹枝状に印旛沼の方に延びている台地の先端に位置する。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭形式は多郭雑形である。

城跡は同一台地上にある小林古墳群の発掘調査時、昭和49年に同調査区域内に認められた遺構の表面調査を行ない、一部を地形測量で補っている。小林古墳群発掘調査区域内で確認された遺構は郭4、土塁3ヶ所、溝1ヶ所、腰曲輪8ヶ所、及び崩壊しているが郭と思われるもの3ヶ所となっている。

小林城は自然地形を巧みに利用した複雑な縄張りを呈している。また「常総軍記」には、天正13年(1585)栗林義長に攻められ、また「東国戦記実録」には天正3年(1575)に落城の記事が見られるが、これらの記事の信憑性を問うか否かは別として、16世紀後半にはおそらく小林城は存在していたと考えてもよいであろう。

大多喜城

夷隅郡大多喜町大字大多喜に所在する。北側は夷隅山系が連なり、南側は夷隅川が流れ、急峻な崖を呈し、やや夷隅川に突出した部分に位置する。

占地形態は平山城、囲郭型式は多郭雑形である。

大多喜城は本多忠勝が天正18年(1590)に築城した近世城郭で、明治維新による廃城まで存続した城郭である。

発掘調査は本丸跡に県立総南博物館が建設されることになり、その予定地内を昭和48年に2次にわたって行なわれた。数棟の建物跡の存在を伺える柱穴群、溝、土壌等が検出された。

遺物はかわらけ、陶・磁器、石製品、金属製品と種類が比較的豊富である。各種の出土遺物は、近世大多喜城の生活を知りうる上での良好な資料であり、またその中には、製作年代が比較的古いものが、灰釉古瀬戸小皿・明代嘉靖・万暦頃の染付等が含まれ、遺構・遺物を考えると、天正18年以前に中世の城が存在していたと考えるのは早急かもしれないが、我々にそれらを示唆するうえでの十分な資料を提供していると思われる。

平 良 文 館

香取郡小見川町阿玉台字本立に所在する。利根川に注ぐ黒部川により、樹枝状に開析を受けた台地の舌状部に位置する。

占地形態は丘陵城郭、囲郭型式は直線連郭である。

発掘調査は昭和50年に行なわれたが、調査区域の $\frac{1}{3}$ を破壊され、一部遺構の検出が不可能であった。

検出された遺構は、平安時代中期末(10世紀)に比定される住居跡と、他に柱穴群、貯蔵穴、溝等が検出された。さらに調査区域(郭)と南側に連がる郭との間には、比高差を持つ二重の空堀が存在する。この遺構は県内でもあまり類例をみないものである。

遺物は住居跡に伴なう、坏、カメその他鎌倉末期、室町中期、中世末期と考えられる陶器、古銭等が検出されている。本遺跡は古くから平良文館跡と伝承されているが、この遺跡が良文の館であったという明確な記録も残っていないし、またその伝承を全く否定する資料もない。ただ、発掘調査により10世紀頃の住居跡が検出されたことで、これを良文(10世紀前半)の時代と結びつけ、すなわち良文館跡とするのは、若干無理のようであるし、館跡と呼ばれているが、形態としては城郭としてとらえるのが妥当であると思われ、また前述した二重の空堀の存在も、この遺跡の性格を考える上で、無視することは出来ず、この遺構はおそらく戦国期の所産ではないかと考えられる。

大 野 城

夷隅郡夷隅町大字大野に所在する。北に開口する大野の谷の入口を塞ぐように、南西から北東に突出した舌状台地の先端に位置し、北側は夷隅川、東側は大野川に面している。

占地形態は丘陵城郭、囲郭型式は多郭雑形である。

発掘調査は昭和52年～53年にかけて行なわれ、同城跡概念図によるⅡ・Ⅲ郭に行なわれた。遺構はA・B地区とも多岐にわたり、いづれも数度の時期差を有する切り合いが見られ、A地区では堀、建物跡、B地区では堀切の構造、柵列跡とおもわれる溝、段状遺構等が検出され、大野城の構造的な理解の上で重要な位置付がされている。

遺物では磁器、陶器の水滴・合子、かわらけ、古銭、石製品、金属製品、木製連歯下駄等が検出されている。陶・磁器類は中世後半の所産によるものとするならば、Ⅱ郭とⅢ郭の間

に介在する空堀には折邪の技法がみられ、また複雑な縄張からして大野城の築城は戦国期の所産と考えるのが妥当であろうか。

久留里城

君津市久留里字内山に所在する。清澄山系から発する小櫃川はその活動によって中・下流域に平野を形成し、久留里はその境界に位置し、小櫃川が『コ』字状に屈曲する部分に沿って築かれている。

占地形態は平山城、囲郭型式は多郭雑形で山頂部に本丸・二の丸、山下の平坦部に三の丸を設けるといった典型的な縄張である。久留里城は寛保2年(1742)に黒田氏が移封されて以来明治4年(1871)まで存続していた。

発掘調査は昭和52年に本丸と二の丸の一部に対して行なわれた。本丸跡では天守台跡、建物跡、二の丸では長屋塀跡、石切場跡、土壌とが検出され、本丸建物跡は天守台構築以前のものであるが、中世期まで逆のぼるかは不明である。

遺物は、陶・磁器、かわらけ、瓦、金属製品、古銭等が検出され、特に瓦の出土は多く、黒田氏の築城以後の所産によるものがほとんどである。調査区域以外にも多くの曲輪の存在が確認され、特に尾根に沿っては数多くの曲輪が配されている。これらの築城方法からみても、単に近世の黒田氏の築城によるだけでなく、それ以前の中世期にその縄張の一部が築かれていたと想定するに十分な資料を提供してくれている。

助崎城

香取郡下総町名古屋字登城に所在する。台地の南側を流れる尾羽川により樹枝状に開析された、半島状舌状台地の先端に位置する。

占地形態は戦国丘陵郭、囲郭型式は2つの郭からなる直線連郭である。

発掘調査は昭和53年に本丸跡と呼ばれている東寄り郭の一部に対して行なわれた。遺構は建物跡1棟、土壌、溝等が検出されたが、時期については不明である。遺物はかわらけ等が検出され、中世期の所産と考えられるものである。

調査以外で顕著な遺構としては、東・南辺の一部に存在する二重土塁であり、これは小室栄一氏の手により実測図を作成され、その中で『異比高面二重土塁』（仮称）と呼ばれるもので、氏の分類表による15型式で“崖縁上及び崖腹に土塁が並走しているもので、異比高面二重土塁に属する型式”、戦国城郭にその例を多く認めることができるものである、と言われている遺構である。本遺跡は、その規模のわりあいには、顕著な遺構を残し、また出土遺物からしても、中世・戦国期に築城された遺構と考えられる。

内山城

八日市場市内山に所在する。借当川により樹枝状に開析された半島状舌状台地の先端に位置する。

占地形態は丘陵城郭、囲郭型式は直線連郭である。

発掘調査は昭和50年に行なわれたが、調査区においては特記すべき遺構は検出されなかった。実測図もなく、正確な遺構の配置はつかめないが少なくとも四つの郭と、二基の土塁の存在が確認されている。縄張りからみて、他の戦国期の城郭においてみられるような、複雑な防禦施設を伴っているとは考えられず、比較的単純な縄張りであるが、付近の地形から検討してみると、城跡が占地されている、位置的な重要性をうかがえる遺構である。

神 崎 城

香取郡神崎町字並木に所在する。利根川に望む南・北に1.5kmを測る独立した丘陵上に位置する。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭型式は多郭雑形である。

神崎城とは、この独立丘陵上に存在する。東ノ城・中ノ城・西ノ城と、3つの城（郭）を総称しての呼称であり、この3つの城（郭）の配置をこの丘陵上でみると直線連郭の囲郭型式とも呼べる。

発掘調査はこの西ノ城に対し行なわれ、調査は土塁3ヶ所に対して行なわれ、遺構として特記するものはない。

またこれらの3つの城が有機的に関連あるのか、同時に存続したか否可については全く不明である。東ノ城要図の中で北辺に二重土塁が存在するが、これは小室氏の分類法による4型式に相当するようと思われる。戦国期も初期の頃の築城かとも考えられる遺構である。

川 原 井 城

君津郡袖ヶ浦町大字川原井に所在する。横川により開析された半島状台地の先端に位置する。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭型式は直線連郭である。

発掘調査は昭和48年～49年にかけて主郭に対して行なわれ、郭内では遺構は検出されなかった。主郭をとりまく土塁は北・西辺では2重土塁が築かれ、小室氏の分類法によると北は7型式、西は4型式に相当するようと思われ、いづれも、戦国期にみられる築城技法の防禦形態をとるものである。

城 の 腰 城

千葉市大宮町字城の腰に所在する。東京湾に注ぐ都川の本・支流により開析された半島状舌状台地の先端に位置する。

占地形態は戦国丘陵城郭、囲郭型式は多郭雑形である。

発掘調査は昭和51年に、郭内部を千葉・東金道路が貫通する為に、事前に調査が行なわれた。調査が行なわれた郭を占地する部分は、台地の中でもさらに三角形に突出した部分で、二辺は比較的急峻な崖を呈し、他の一辺は台地を分断するように空堀が掘られている。この空堀・土塁に折邪の遺構が認められる。発掘調査において、特記すべき遺構、遺物は検出されなかったが、道路予定外区域で二ヶ所空堀の発掘を行なったが、一部空堀が完全に掘られておらず、また想定していたプランと、若干のずれが生じるなどの問題点も提起されているが、築城の技法からみても、戦国末期頃の所産と考えるのが妥当であろう。

館山城

館山市館山字城山に所在する。館山湾に注ぐ汐入川と見留川に挟まれた独立丘陵に位置する。

占地形態は平山城、囲郭型式は多郭雑形である。

館山城は里見氏九代義康により天正18年(1590)に築かれ、慶長19年(1614)に十代忠義が改易されるまでの25年間存続した近世の城である。

発掘調査は昭和52年より3ヶ年にわたり、国の重要遺跡確認調査として行なわれ、測量図作成、発掘調査、文献調査にわかれて実施された。城跡の基本的なグランドプランを把握する為に、実測図を作成し、結果的には戦国丘陵城郭にみられるような郭の配置が認められるなどの成果が得られた。発掘調査では数ヶ所の地点をその候補地として考えられたが、頂上部等は戦時中軍隊の使用により、現形をほとんど留めておらず調査の対象から除外し、義康御殿跡と伝承される南麓に位置する郭に対して調査の主体が置かれた。特記すべき遺構は検出されなかったが、遺物としては近世初頭に比定される天目茶碗片が検出されており、かなりの勢力を有した人々の存在を示唆されうる遺物である。

佐倉城

佐倉市城内町に所在する。印旛沼西側の南岸に注ぐ鹿島川の、河口付近右岸に半島状に突出した台地上に位置する。

占地形態は平山城、囲郭型式は多郭雑形である。

佐倉城は慶長15年(1610)に小見川から移封された土井利勝が築城したものである。また一説には、中世末期に千葉氏が築いた鹿島城の跡地に築かれたとも伝えられる。

発掘調査は、この地に国立歴史民俗博物館(仮称)が建設されるに致り、昭和46年より6次にわたる調査が行なわれ、椎木曲輪地区、馬出地区等の調査が実施された。これらの遺構の他に、近世佐倉城以前に築かれたと思われる空堀跡等が検出され、中世期の城郭の存在が示唆される発見でもあり、現状においても中世的な様相を呈する遺構との関連性を、充分

検討する必要性を有するものである。

3. ま と め

前章で県内における17件の調査例を取り上げ、若干の考察を加えてみたが、昭和37年に松戸市の小金城で考古学的方法による調査が行なわれてから、約20年間に40数例の発掘調査が実施され、特に昭和40年代後半から件数が増え昭和47・48年は6件、49・50年は8件、51年は9件、52年は9件、53年は3件の調査が行なわれた。

調査された遺跡の半分以下の調査例の紹介でもあり、多くは語れないが、そのほとんどが下総台地における調査である。(第10図参照)これは開発事業が下総台地で盛んに行なわれたことを物語り、今後も下総台地での開発は続くであろうし、さらに南下し、上総・安房地方での開発に伴う調査は増加するであろう。

発掘調査での具体例をみてみると、まず、存続時期が判明している城郭である。小金城、佐倉城、真里谷城、久留里城、大多喜城、館山城があげられるが、佐倉城、久留里城、大多喜城等では近世以前の築城遺構の存在が確認され、また新たな問題が提起された。またこれらの城跡より検出された遺物は、存続年代が判明している遺構からの出土という点で、他城跡出土の遺物との比較検討を行なう上での基礎的資料となり、これは重要な課題である。今回は時間的な制約もあり行なえなかったが、いずれの機会にはまとめてみたい課題である。

個々の遺構に関しては、特に空堀・土塁という防禦施設に特徴的な遺構が確認されている。これら以外にも城郭に伴う種々の遺構は存在するが、特に顕著な例として前者を取り上げた。

折邪……成東城。津辺城。大野城。城の腰城。

二重土塁…助崎城。神崎城。川原井城。

二重空堀…平良文館。

これらの遺構は、いずれも戦国期にみられる特徴的な築城方法の一例である。特にこれらは、戦国丘陵城郭と呼ばれる占地形態の城郭で顕著にみられる遺構であり、上述の確認された城跡も、下総台地に占地する城郭に多くそれらが確認されている。下総台地における城郭の特徴は一章で述べたが、若干付け加えると、複雑な自然地形を巧みに利用した縄張が行なわれ、特に半島状台地の先端部に位置することにより、水系を支配し、谷戸田経営の強固化を図ったものと考えられ、そのほとんどが戦国期(15C末～17C初頭)の築城と考えられる遺構である。また、これらの特徴的な遺構が認められるからといって、その城郭が中世戦国期に築城されたと考えるのは、いささか早急な考えかもしれないが、城郭の存続時期を解明する上での手掛りの一つであることに違いはないのである。

以上、遺構を中心に発掘された城郭を見て来たが、本稿を執筆するにあたり、種々の報告

書を参照したが、いまさらながら調査の重要性を痛感したのである。城郭を正確に把握するには、調査者の城郭に対する問題意識の有無に係ってくるが、その有無によって調査が変るとなると、由由しき問題である。

城郭を総合的に判断していく上では、以前から言われていることであるが、総合的調査、すなわち発掘調査、測量、文献調査、建築学等、の必要性を再認識させられ、県内では、小金城の調査時にその先例を伺えたが、それ以後の調査では軽んじられる傾向にあった。今後の調査において、総合的調査の必要性を強く望むのである。

また、城郭の縄張がどの位の規模を有するかを確認するのも、調査者の大きな役目である。調査対象区域が、その城郭のどこに位置するかという関連性が重要であり、過去の報告例からも、城跡の一部に道路が通過、山砂採取による破壊、といった開発に伴う調査は、調査対象区域を点でみてしまう傾向があり、面的な観察の目が向けられず、正確な測量図が作成されないまま、遺跡が消滅していった例は数多く見られるのである。これらについては、今後研究をしようとしても記録が残っていない為に、何も語ることが出来ないという、重大な問題を含んでいるのである。正確な測量図作成によりプランの復元・再現を計り、また発掘調査により、その不足分を補って、総合的な観察を進めてゆくことは、もはや常識的な問題であり、いまさら云々することは矛盾を含むが、ここでまた述べなければならない現状を理解していただきたい。

今回の報告においては、遺構に主眼を置き、遺構・遺物の比較検討は行なわなかった。従って、築城年代観にも多少のずれを生じ、もうすこしはっきりとした時期が判明したかもしれないが、それは今後の研究課題として、諸氏の御批判を仰ぎたい。

参 考 文 献

個々の城跡に関しては、文献目録の項を参照されたい。

小室栄一『中世城郭の研究』人物往来社（昭和40年）

大類 伸・鳥羽正雄『日本城郭史』雄山閣（昭和11年）

『下総千葉氏の群像』千葉日報社（昭和51年）



第10図 発掘された城郭